

「ただいま」と思える ほっとできる場所が必要

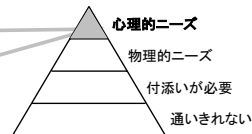
病棟での時間の流れは、治療のためにあります。検温や回診、点滴の交換など、医療従事者の出入りが多くあります。また2人部屋、4人部屋となれば、隣のベッドとはカーテンで仕切られているだけで、いつも隣の人の気配を気にする生活です。当然のことですが、自分だけの時間・家族だけの時間を持つことは難しく、好きなことを好きなときにできなくなったり、いままであたりまえだったものが遠くなっていってしまいます。

人目を気にせずにリラックスできる環境、生活感のある「わが家」のような雰囲気の中で家族の時間を持つことが、疲れた心を元気にしてくれます。

ハウスへの心理的ニーズ

「ただいま」と思える

ほっとできる場所が必要



子どものそばにいたいと希望して病棟にいる母親たちも、日常とかけ離れた生活が長期になるとストレスフルになっているのがわかる。

(小児科医師)

子どもの食欲がなく、食べてくれないときに、自宅から通っていれば「家庭の味」のお弁当を作ってあげることができる。自分の食事も売店のお弁当ばかり続いて、おなかが減っていても手が出なくなることもある。

(病棟付き添い家族)

いたれりつくせりのサービスが欲しいわけじゃなくて、ただちょっとゴロゴロしたり、だらだらしてみたり、家で過ごすような時間が欲しい。

(病棟付き添い家族)

同じ立場だから 話せることがある

子どもの病気のこと、残してきた家族のこと、地元に戻ってからの治療のことなど、自宅を離れての付添い生活にはたくさんの心配や不安がともないます。家族や親しい友人と離れているため、心配事を相談したり悩み事を話す相手がなく、たくさんの「話せないこと」を抱えながら子どもの治療に付添うことになります。身近な人だからこそ「話せないこと」もあるかもしれません。

苦しいとき・つらいときに自分の状況をわかってもらいたいと思っても、事情を知らない人には「わかってもらえないのではないかな」、「知ったようなことを言われて傷つくかもしれない」と思うと、人と話すことを避けてしまいがちです。状況が同じだからわかりあえること、話せることがたくさんあります。

そのため複数の部屋をもつハウスではキッチン・ダイニングなど共有スペースを設けて、自由に話ができるようにしています。

同じような状況の家族と出会うことで、「大変なのは自分だけではない」ことがわかり、地元の家族の心配事を話しあったり、互いに励ましあうこともできます。

ハウスへの心理的ニーズ

同じ立場だから話せることがある

心理的ニーズ

物理的ニーズ

付添いが必要

通いきれない

たとえ病気が違っても、家族と離れて、子どもに付添って病院に通う大変さを知っているお母さんだとおもうと、声をかけ、何気ない日常会話をする事ができた。大きさに何かを相談したいわけではなく、ちょっとした会話ができることが気持ちを楽にしてくれた。

(ハウス利用者)

地元の病院ではひとりしかいない病气。周りのひとに「大変ね」と言われてしまい、どう大変なのか、大変だからどうするのか、一緒に話してくれる人がいない。地元に戻るのが不安。

(ハウス利用者)

「社会」に支えられている 実感が家族を支える

病院での付き添い生活が長くなってくると、病院と滞在場所との往復のみになり、生活が病院だけになって、気づかないうちに世界が、狭くなったように感じられます。地元を離れ、子どもは学校を休んで、自分は仕事を休んで治療を続けていると、社会との接点をどんどん失い、子どもの病気という困難に家族だけ、自分だけで向かい合っているという心細さを感じ、不安を大きくします。

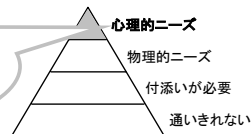
まずはハウスがあるということ、「子どもが病気になり、滞在に困ることがある」ことを知っている人がいることが子どもの病気と闘う家族の気持ちを支えます。

また、そのハウスを運営するために多くの力、ボランティアが支えていること、多くの個人の方や企業からの寄付で成り立っていることが、病気の子どもをその家族の励ましとなり、心の負担を少しだけ分けて持つことにつながります。

ハウスへの心理的ニーズ

「社会」に支えられている

実感が家族を支える



自分とは無関係の世界にいたと思っていた主婦の人たちがボランティアとしてハウスを支えてくれていることを知り、嬉しかった。自分もいつかはできることをしたいと思った。

(ハウス利用者)

自分は子どもが病気になるまでハウスのことを知らなかった。たくさんの個人の方や企業がハウスのことを知っていて寄付してくれていることにおどろき嬉しかった。

(ハウス利用者)



治療だけ、病院だけでは 子どもの気持ちが続かない

病棟の環境は、自宅の環境とは大きく異なります。自宅を離れ、家族と離れ、病棟で毎日過ごすことは、自由にならないストレスや病気の苦しさ、治療の痛み、副作用のつらさなど、我慢しなければならぬことがたくさんあります。痛いときやつらいときにおもいきり泣いたり、わがままをいいたいときもあるけれど、同じ病室の友達の目が気になるし、お母さんを困らせてしまうからと耐えることもあるでしょう。

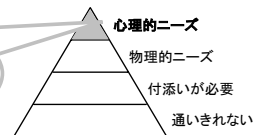
我慢だけ、痛いだけでは治療を続けることができません。心を休ませることで、また治療を続ける気持ちを持つことができるようになります。

自宅へ帰ることができれば、自宅で家族の時間を過ごすことが一番です。それが難しいときでも、病院近くにハウスがあれば、わが家で過ごすような時間を持つことができます。

ハウスへの心理的ニーズ

治療だけ、病院だけでは

子どもの気持ちが続かない



外泊許可をだして、週末を自宅で過ごしてくると、表情が違う。元気になって病院に戻ってくる。

(小児科医師)

子どもは自宅への外泊をほんとうに楽しみにしている。自分で自由に時間をつかったり、思い通りに過ごせることがいいみたい。

(病棟付き添い家族)

